幕末維新期における渋沢成一郎の思想と行動

人文科学研究会　法学部政治学科４年　佐藤要　学籍番号 31255741

目次

1、はじめに
2、渋沢成一郎の生い立ち
3、一橋家への仕官から幕臣へ
4、彰義隊結成と分裂
5、振武軍と飯能戦争
6、箱館戦争
7、まとめ
8、参考文献

1、はじめに

慶応４年１月３日、「討薩の表」を持ち、天皇のいる京都を目指す旧幕府軍と、街道を封鎖し、彼らの入京を阻止しようとする薩摩藩・長州藩の連合軍が武力衝突した。鳥羽伏見の戦いが始まり、明治２年５月18日まで続く戊辰戦争の始まりであった。鳥羽伏見の戦いは薩長軍の勝利に終わり、15代将軍徳川慶喜は１月６日、江戸へ脱出、以後、恭順の態度を取り続ける。しかし、鳥羽伏見の敗北後も慶喜のこの姿勢に納得せず、徹底抗戦を主張する勢力は多数あり各々の目標の元、戦い続けることになる。

その一人が本論文で扱う渋沢成一郎であり、振武軍である。ここでは慶喜の重臣である成一郎がなぜ恭順に従わなかったのかを彼の生涯を追いながら検討する。そして、振武軍を彰義隊から分裂した一派ではなく、異なる戦略と目的を持った一集団として評価しようと試みるものである。

なお、引用史料の旧字体については適宜、常用漢字に変更したことを予め断っておく。

2、渋沢成一郎の生い立ち

渋沢成一郎は天保９（1838）年６月、武蔵国榛沢郡血洗島村（現埼玉県深谷市血洗島）に富農渋沢長兵衛（文左衛門）の長男として生まれた。幼名は喜作、諱は英明、雅号を蘆蔭といい、一橋家仕官時に成一郎を名乗り、明治になってからは喜作の名に復した。また、振武軍を率いて飯能戦争を戦った時には大寄隼人と称した。（小高旭之　2008,p158）なお、渋沢栄一は成一郎の父である長兵衛の弟元助（市郎衛門）の長男であり、天保11（1840）年に生まれている。つまり、二人は２歳差の従兄弟ということである。（小高　2008,p.150）

彼ら二人は幼少期、尾高新五郎（惇忠）から学んだ。尾高新五郎は榛沢郡下手計村（深谷市下手計）の里正[1]尾高勝五郎の長男で天保元年（1830）に生まれている。尾高新五郎の母やへは成一郎の父長兵衛、栄一の父元助とは兄妹の関係にある。（小高　2008,p.43）

---

[1] 尾高勝五郎　榛沢郡下手計村の里正（小高　2008,p.43）

彼らの家は農業として麦や藍を作り、養蚕や質業など幅広く行っていた。また、自家で作った藍や他家から藍を買い入れたものを使って藍玉を製造し、信州・上州・秩父方面へ売りに行くこともしていた。（雨夜譚　p.18）

尾高新五郎は「七歳で村の長老（[2]渋沢仁山か）に四書の句読を受け、傍ら祖父[3]渋沢宗助に書道を学んだ。長じて隣村に寄寓していた[4]菊池菊城に贄を執ったことはあるものの、ほとんど独学で経義を修めたといわれる。」（小高　2008,pp.43-4）といった幼少期を過ごした。また、彼は天保 12（1841）年に水戸城外で徳川斉昭の模擬戦的追鷹狩を見物、感動し、これが水戸学へ傾倒するきっかけとなったようである。（荻野勝正　2015,p.7）

水戸学に傾倒し、尊王攘夷派の志士となった尾高新五郎は弘化 3（1846）年頃から近隣子弟の教育に当たり、そこで渋沢成一郎と栄一も同年より教育を受けたようである。（小高　2008,p.159）また、彼らは江戸や両毛などへも出掛け、尊王攘夷の志を温めていった。その中で江戸では[5]海保漁村の塾と北辰一刀流の千葉道場に出入りし（成一郎の上府は文久 2 年、栄一は文久元年と同 3 年）、郷里では来遊する菊池菊城、中野謙斎、藤森天山など漢学者からも教えを受けた。（小高　2008,p.152）また、中井弘、多賀谷勇、広田精一、戸田六郎らとの交流もあり（雨夜譚　p.30）、後述する一橋家用人の[6]平岡円四郎や川村恵十郎ともこの時期に出会っている。（小高　2008,p.150）

新五郎、成一郎、栄一らは「志士」であることを自認し、「人心の土崩、政府の瓦解」を口にした。しかし、具体策はなく嘆き、憤り、幕府が結んだ和親条約＝城下の盟と考え、戦ってのち対等な和であると考えていた。（塚原　1909,p.35-40）

そうした中、文久 3（1863）年 6 から 8 月頃に高崎城乗っ取り計画を考え始める。

この計画はまず高崎城を乗っ取り、兵備を整えた上で鎌倉街道を進んで横浜へ出て焼き討ちと外国人の斬り殺しを行うというもので武具の準備も整っていた。実行日は文久 3 年 11 月 23 日の冬至の日で参加者は渋沢成一郎と栄一、尾高新五郎、千葉道場の真田範之助、佐藤継助、竹内練太郎、海保漁村の塾生の中村三平と親戚などから集めた 69 人ほどだった。（雨夜譚　pp.36-7）無謀な計画ではあるが彼らとしてはとにかく世の中を混乱させることが目的であり、そうすれば本当に能力のある人間が台頭し、失政続きの幕府に代わって日本を治めることができるようになるという考え方でそのための嚆矢となれば良いと思っていた。（雨夜譚　pp.48-9）また、彼らは国外との問題は国民全員で当たるべきと考えていた。（塚原

---

[2] 渋沢仁山　渋沢栄一の宗家・三代目渋沢宗助の伯父。自宅で学塾「王長室」を営み、論語を中心に経学を講じた。弟子に桃井可堂がいる。（荻野　2015,p.7）桃井可堂は本文で後述する成一郎らの高崎城乗っ取り計画と同日に沼田で挙兵を企てたが、幕府への密告者により実行されなかった。成一郎らと連絡を取り合ったとする説もあるが定かでない。（塚原蓼洲　1909,p.53）

[3] 渋沢宗助（新三郎）　渋沢総本家政徳の子。大川平兵衛に神道無念流を学ぶ。（小高　2008,p.45）

[4] 菊池菊城　儒者、江戸で折衷学派の山本北山に学び、諸国を遊歴。安政年間には三代目渋沢宗助宅で私塾「本材精舎」を開設。（荻野　2015,p.7）

[5] 海保漁村　太田錦城に学び、佐倉藩主に仕える。安政年間には幕府医学館の儒学教授。（小高　2008,p.42）

[6] 平岡円四郎　旗本岡本近江守の四男。性孤高、変物と目されたが、才気煥発、弁舌峻鋭で川路聖謨・藤田東湖の推薦により一橋家に雇われる。慶喜が将軍後見職となるとその下で活躍する。（雨夜譚　p.298）本文で後述するように成一郎と栄一を取り立てたのはこの平岡。

1909,p.60)

このように渋沢成一郎は「憂国の志士」と交流しながら、水戸学と尊王攘夷思想に染まっていき 20 代前半（26 歳）までを過ごしたのである。そして、[7]幕府の打倒を考えていた。

3、一橋家への仕官から幕臣へ

前述の高崎城乗っ取り計画は結果的には実行されなかった。文久 3 年 10 月 29 日に[8]尾高長七郎が京都から帰郷し、中止するよう説得したからである。長七郎は京都で八月十八日の政変や大和挙兵の惨敗の情報を得ていたため、それらを理由に計画の杜撰さと無謀さを指摘したのである。（雨夜譚　p.49）中止と決まったもののこの当時は関八州取締役の見回りが厳しく、計画が露見するおそれもあったため成一郎と栄一は郷里を離れることに決した。そして、11 月 8 日に郷里を出て 13 日まで江戸で逗留。その間に平岡円四郎の留守宅（円四郎は慶喜とともに 9 月から京にいた）へ行き、平岡の家来となった。（円四郎から妻に言伝されていた）その後、14 日に江戸を出て 25 日に京都についた。（雨夜譚　pp.49-52）この時点では成一郎と栄一は一橋家家臣の平岡円四郎の家来であれば、全国を往来するのに便利であると考えていただけで未だ尊王攘夷の志を持ち、幕府の打倒を考えていた。

京都で成一郎と栄一は「志士」たちと交わり、伊勢神宮に出掛けたりして過ごしていた。（雨夜譚　pp.52-4）年が明けて元治元（1864）年になり、その 2 月上旬、江戸から尾高長七郎が捕縛されたという手紙が届く。これは長七郎が江戸で出る途中、通行人を斬り殺したため、捕まったという報だった。問題は長七郎が捕縛された時、成一郎と栄一からの手紙を持っていてそれが幕吏の手に渡ったことであり、手紙の内容は幕府の失政を罵り、その転覆を願うものであった。（雨夜譚　pp.55-6,59）平岡円四郎からもこのことを詰問され、成一郎と栄一は進退に窮してしまった。そこで、平岡から一橋家へ仕官してはどうかと提案される。成一郎と栄一は二人で話し合った末この提案に従うことになる。一橋家に仕えるということは敵視する幕府を支えることになり、初志に反する。しかし、尊攘派の多い長州か薩摩に逃げようにも頼れる友人がいない。初志貫徹するのは潔いがそれで死んでは日本のために何の益もない。一橋家の当主は有為の人物と言われる一橋慶喜であり、幕府とは違う。そして一橋慶喜は現在、禁裏守衛総督に任じられている。この職務の主君の下で働くなら、尊王の志にも合致する。また、その家臣となれば、獄中にいる尾高長七郎を救う便宜を図れるかもしれない。このように考えて、二人は一橋家に仕えることになる。（雨夜譚　pp.60-6）この時、二人は平岡に無理を承知で慶喜への拝謁と意見開陳も願い出る。何とか許可され、慶喜と対面することになる。栄一はこの時の意見開陳の内容を自伝『雨夜譚』で次のように振り返っている。

> 君公には賢明なる水戸烈公の御子にましまして、（中略）京都守衛総督という要職に御就任あそばされた上は、恐れながらいかにも深遠の御思召があらせられての事と存じます。今日は幕府の命脈も既に滅絶したと申し上げてもよい有様であります。ゆえに今なまじいに幕府の潰れるのを御

---

[7] 幕府への憤りの思いは栄一の方が強くそれは 16、7 歳の頃代官から罵られたことに起因している。（雨夜譚　pp.25-8）

[8] 尾高長七郎　尾高新五郎の弟で名を弘忠という。剣道の達人であったが、本文で後述する通行人殺傷事件を起こして捕まる。（荻野　2015,p.21）彼は老中安藤対馬守襲撃（坂下門外の変）の計画に加わっていたが、新五郎、成一郎、栄一の説得により、直前で計画から離脱していた。（塚原　1909,p.43-4）

弥縫なされようと思召すときは、一橋の御家もまた諸共潰れますから、真に御宗家を存せんと思召すならば、遠く離れて助けるよりほかに計策はないと考えます。それゆえ君公には天下の志士を徐々に幕下に御集めあそばすことに御注意が願わしゅう存じます。（中略）天下を乱すほどの力量ある人物をことごとく御館に集めたならば、他に乱すものがなくなって治めるものが出ます。いわゆる英雄が天下を掌に回らすというはここであろうと考えます。（中略）しかしながら以上申し上げた通り、天下の有志輩が往々御館に集まって、姑息の旧弊も次第に改まり諸事快活の御取扱振りが行わるるという場合になりますると、幕府の嫌疑は目前の事で、つまる処は一橋征討などという論も出るでありましょう。万々一そうなった時には、やむをえず兵力を以て抵抗するも差支えはありますまい。申さば天武大友の乱のようなもので、敢えて好む事ではござりませぬが、社稷の重きには替えられぬと存じます。畢竟幕府を潰すのは徳川家を中興する基であります。（後略）

（雨夜譚　pp.65-6）

つまり、尾高長七郎の通行人殺傷事件という偶然の出来事から成一郎たちはそれ以外の身の処し方が思いつかず、ひとまず、一橋家に仕官することになるのである。そして、重要なのは成一郎らにとって、「一橋家≠幕府」と考えている点であり、彼らは幕府がこのままでは倒壊する、倒壊すべきものだと考えている点は郷里にいた時から変わっていないことである。そして場合によっては一橋家は幕府と決別さえするべきだと主張しているのである。

一橋家に仕えると初め、成一郎の身分は奥口番、役職は御用談所下役出役となった。元治元（1864）年2月のことである。その後、身分は御徒士、小十人と進む。役職も御用談所調方出役となる。（小高2008,p.161）この間、成一郎と栄一を取り立てた平岡円四郎が暗殺されるという事件があったが、平岡の跡を継いだ[9]黒川嘉兵衛も成一郎らを重用した。（雨夜譚　pp.80-1）

慶応2（1866）年7月に第二次長州征討の最中、14代将軍徳川家茂が死去した。これに伴い、慶喜は徳川宗家を相続、12月には15代将軍徳川慶喜となった。このことに際し、成一郎と栄一は強く反対した。以下、栄一の自伝『雨夜譚』からの引用である。

この時に自分と喜作とはその噂を聞くや否や、大いにその不可なることを唱えたが、その時には黒川嘉兵衛の権勢が衰えて[10]原市之進という人が用人の筆頭になっていた。（中略）この人に向っては御相続の不可であるということをしばしば論談したことがある。その論談の趣旨は、今日の徳川氏はこれを家屋に譬えていうと土台も柱も腐り、屋根も二階も朽ちた大きな家の如きものである。もしこれを修繕しようというには大黒柱一本取換えたとてそれで保つものではない。（中略）しかるに今一橋公は賢君であるの材能が多いのといって御継統の将軍となし奉ったとても、恐れながら君公一人ではドウすることも出来ず、あるいはかえって滅亡を早くするようなことがあるかも知れぬ。その訳は、目今の処では天下の人が皆幕府の役人が悪いとばかりいって居るからま

---

9 黒川嘉兵衛　幕臣で平岡と並び、その人物を世に評された。（雨夜譚　p.300）
10 原市之進　水戸藩士で藤田東湖に学び、のち昌平黌に入る。慶喜の下で幕政改革に尽力した。（雨夜譚　p.302）

だしも目の注ぐ所怨みの帰する処が緩なれども、向後賢明の君が相続したとなると、百般の感応力が著しく強くなる訳である。（中略）今一橋公が大統を継いで将軍家の御相続をなさるというはまるで死地に陥るので、実に失策の極、危殆千万な事柄である。ゆえに何卒相続の事は切に御止まりにならんことを願いたい、その代りに自分らの考案は、この累卵の如き危い幕府たりともこれをして一日も長く保つようにするのには、一橋公は御相続を御辞退になり、他の親藩から幼弱の人を撰んで将軍家の継統として、一橋公には相替らず御補佐の地に居られて、依然として京都守衛総督の御職掌を尽さるるが御双方の得策であると思う。

（雨夜譚　pp.117-9）

成一郎と栄一は反対の意思を一橋家用人の原市之進に伝え、直接慶喜に拝謁して述べる段取りまでできていたが、その前に慶喜は将軍職に就いてしまった。そのため、成一郎と栄一はともに幕臣となった。ともに陸軍奉行支配調役となったが、これは[11]御目見以下の役向であった。[12]栄一の落胆は凄まじく自伝の中でもその時の胸中を語っている。（雨夜譚　pp.119-21）成一郎は失意の中でも仕事をこなし、慶応 3（1867）年に御目付書役、その後、奥御右筆格内務掛奥兼へと昇進していく。（小高　2008,p.161-2）また、別れに際して栄一と成一郎は、場所は異なるがお互いに亡国の臣となることを覚悟して、末路に不体裁のないよう気を付けようと話し合った。（雨夜譚　p.127）

将軍就任後の慶喜は慶応 3 年 10 月 14 日に大政奉還をした。

成一郎は大政奉還にも反対し、その後も幕府の権威恢復を唱えた。そのための主戦論も展開した。具体的な内容は次の通りである。

今日に於ては御三家御家門の兵威を盛ならしめ、幕府に敵する諸藩を壓服し、将軍家を輔佐し奉らんこと第一の急務なり。紀州は固より幕府と存亡を共にするの決心なれば、尾越に於ても宜しく藩兵を上京せしめて、幕府の爲めに盡くさゝる可からず。彼の幕府を侵さんとするの諸強藩が頻に兵士を京師に繰り入るゝは、兵力を以て幕府に迫るの手段なれば、我も亦其用意なかる可からず。畢竟今日の状勢に至りたるも幕府を始とし、親藩の兵力衰弱したるに由るなり。此の時に當り、大いに発奮して威武を輝かさんと、其衰勢を挽回する所以の道なり。

（山崎有信　1910,pp.59-60）

これを尾張の成瀬隼人正、越前の中根雪江らへ迫ったとされている。（山崎　1910,pp.59-60）

慶喜は慶応 4 年 1 月 3 日から始まる鳥羽伏見の戦いにて敗走、江戸へ脱出した。渋沢成一郎は鳥羽伏見の戦いの勃発した 3 日には慶喜に従い大阪城内にあり、そこで慶喜から軍事総裁松平豊洲に付属するよう命令を受け、軍目付として戦場に出た。その中で負傷し、7 日になると慶喜の帰府を知り、大阪城では徹底

---

11 成一郎と栄一は小十人に進んだ時、御目見以上の身分となっていた。

12 栄一はその後、原市之進の勧めで徳川昭武のフランス万博出席、留学に随行し、慶応 3 年正月に日本を発つ。（雨夜譚　pp.124-7）

抗戦を主張したが、容れられず2月4日に江戸に着き、浅草の屋敷に入った。(小高　2008,p.162-3) 成一郎は慶喜の勤皇の心の篤さに感服していたため、幕府を倒すために慶喜を「朝敵」とした者たちに憤りを覚えていた。(塚原　1909,pp.104-6,120)

このように偶然の事件から進退窮まり、成一郎と栄一は一橋家に仕えることとなった。一橋家の当主は賢明と目されていた慶喜であり、水戸の徳川斉昭の子であった。それ故に成一郎らが幼少期より信奉してきた水戸学、尊王の志とも通じる点があり、一橋家のために働くことを受け入れていった。また、慶喜の担当する京都禁裏守衛総督は禁裏つまり朝廷、天皇を守ることにも繋がるため、彼らの尊王の志とも合致した。そして、[13]慶喜と直接に面会する機会もあり、その中で慶喜を信奉するようになっていった。しかし、慶喜が将軍に就任しても成一郎らにとって幕府は倒すべき存在、倒れるべき運命にあるものであった。この認識は一橋家仕官当時、それ以前の尊王攘夷運動中から変わらない。それ故に将軍就任に強く反対したのである。慶喜が将軍になってしまってからは大政奉還に反対し、幕府の権威恢復を図ろうとする。幕府を倒すべきものとしつつも、自身がその組織の一人となった以上は幕府のために献身するのである。一橋家家臣になった時と同じようにやるからにはとことんやる姿勢がこうした行動からわかる。そして、戦わずに幕府の権威恢復はないと主張するのは、彼が開戦不可避と判断し、負ければ慶喜の命も危ないからと判断したためである。

慶応3年正月に栄一は昭武の随行員としてフランスに向け、日本を発った。成一郎はその後も慶喜の下で働き続け、鳥羽伏見の敗戦、江戸へ帰還することになる。ここで幼少期から[14]共に行動してきた成一郎と栄一は別れることになるのである。

4、彰義隊結成と分裂

鳥羽伏見の戦いの後、事態は次のように推移した。慶応4年1月10日に慶喜ら官位剥奪・領地没収。23日、慶喜は抗戦派の小栗忠順を罷免、恭順派の勝海舟、大久保一翁を登用。2月11日、伴門五郎と本多敏三郎起草の「檄文」を回状。2月12日、「檄文」に応じ、雑司が谷茗荷屋に17人集う。同日、慶喜、上野寛永寺に蟄居。(森　2004,pp.285-6)

慶喜は鳥羽伏見の戦いの後、朝敵とされ戦意を失い寛永寺での蟄居生活に入った。しかし、そうした事態に納得できず、水戸出身で一橋家家臣の 本多敏三郎、幕府の御徒士であった 伴門五郎らは慶喜を救うために立ち上がった。(森　2004,pp.47-8) この「檄文」の内容は以下の通りである。

> 我公元来尊王の為に御誠忠を尽させられ、且昨冬宇内の形勢御洞察の上、二百年来の御祖業を一朝にして朝廷え御帰遊ばされ候。公明至誠の御英断は天人の知る所、然るに奸徒共の詐謀に因て今日の危窮に至候段、切歯に堪ゆべからず候。君恥らるれば臣死するの時、殊に御同様橋府以来随従の身にて如何ぞ傍観相成べき哉。然れば各共力同心して一廉の御用に相備、多年の鴻恩に報

---

13 栄一の『雨夜譚』の中では3，4回会ったとある。
14 一橋家仕官中の仕事内容には違う時もある。詳しいことは『雨夜譚』で述べられている。

いんは此時也。就ては百事御相談申度く候間、明十二日昼九時雑司ヶ谷茗荷屋え晴雨共後出会之れ有るべく候。此段廻状を以て申進候以上。

二月十一日　　橋府随従之有志

撒兵方

尚、此の廻状を以て、局中一橋御召連の諸君え、急速御廻送の上、御銘々御姓名御承知附、御記しなさるべく候。

『附箋』再開来る十七日四ツ谷鮫ヶ橋入横町円応寺

（森　2004,p.47）

慶喜のため、集まり何かの役に立とうという内容である。この「檄文」からは具体的に何をするのかはわからない。また、17名しか集まらなかった。

次の会合は『附箋』に記された17日の四ツ谷鮫が橋円応寺であった。ここでは30名程集まった。21日には同じ円応寺に67名集まった。ここで、中心人物となっていく渋沢成一郎や天野八郎も姿を現す。（山崎　1910,p.48）そして、「血誓帖」を作る。その内容は以下の通りである。

方今社稷危急存亡の秋、臣子尽忠報国は士道の常にして諸士の仰ぐ所なり。然れども昇平三百年の久き、士気相弛み候より、尽忠報国は人口に膾炙する而己互に其の実際を見ず。故に今日の形勢に至り候も、敢て人を恨むに詮なく、誰か是を恥じざる哉。然言行相反せず愈身命抛ち君家の御窘辱を一洗し、反逆の薩賊を戮滅し、上朝廷を尊奉し下万民を安堵せしめ、遥に神祖の聖霊に報じ奉るべく有志の士は断然一死を天地神明に誓ひ、姓名を此帖に記載を仰ぐ。我等不敏と雖も聊か馳駆の労を以て、諸君の孤忠を世に示さんものなり。

（森　2004,p.49）

ここでは先の「檄文」とは異なり、身命をなげうって主家の冤罪を晴らし、薩賊を討って朝廷を奉じ万民を安堵させると少し物騒な言葉も使われ、威勢のいい文句となっている。

23日には浅草本願寺に130名集まった。（森　2004,pp.285-6）そして、隊名がなく、「尊王恭順有志会」と呼んでいたものを「彰義隊」に決定する。そして、渋沢成一郎を頭取とするなど人事を決定した。さらに、「同盟哀訴申合書」を作成して、幕府の大目付梅沢孫太郎に提出した。しかし、彼らによる[15]上京は許可されなかった。（山崎　1910,pp.50-2）この「同盟哀訴申合書」の内容は以下の通りである。

此度上意の御書付拝見、一同恐惶謹慎罷在義、篤と感念仕候得ば、上様従来尊皇の御忠誠御切實之際より、君側の奸悪御掃除之御擧動、豈料哉、天怒に触れ奉り、御恭順之一途片言御辯解不被爲及御伏罪、天裁御待被爲遊候御趣旨、臣子之身分如何共不可言、一同等閑に不可存義に御座候。

---

15 上京許可下りなかったのは、既に松平大和守や輪王寺宮が嘆願に行っていた。また、彰義隊内で何のための上京なのか定まってなかった。（1、謝罪。2、雪冤。3、武力行使）（山崎　1910,p.52）

依而同盟決死、上様之御成業御冤罪を條陳し、闕下に哀訴仕候外無之と申合、血誓致候。萬一及違犯候者は乱世姦雄之謀に陥り君臣之大義を忘却し、売国偸生之狗鼠に御座候得ば、天地神人之冥罰不可遁候。仍而神文如件。

(山崎　1910,pp.51-2)

ここでは上様（慶喜）が無実であること、その雪冤のため同盟・血誓したことなどこれまでの「檄文」や「血誓帖」が隊士の士気を鼓舞するようなものであるのに対し、「同盟哀訴申合書」は幕府へ提出のためもあってか外へ結成理由などを伝えるようなものになっている。

こうして彰義隊は結成された。渋沢成一郎が関わるのは2月19日からである。この日、本多敏三郎や[16]須永於菟之輔らが渋沢成一郎のもとに参加要請に来る。それを受けて成一郎は21日の集まりに参加する。ただし、成一郎は最初から会合に出席していたのではなく、近くで会合について報告してもらいながら様子を窺っていた。人数が増えたところで成一郎は会場に入った。その時には議論紛糾（恭順か抗戦かなど）、何も決まらなくなっていた。そこで、伴門五郎が成一郎を皆に紹介した。成一郎はそこで次のように発言した。(山崎　1910,p.61)

成一郎曰く、臣子の分として、盡くす處種々無慮なり。然れども先づ第一死生を共にする事。第二方向を一定する事。第三方向は衆議を以て之を決せん事。是れにして異議無くんば直に血誓せんと。

(山崎　1910,p.61)

成一郎は「まず隊は生死を共にする事、第二に方向を一定にする事、第三にその方向は衆議を以て決する事」(森　2004,p.108) を述べた。さらに、主君が謹慎しているのだから家臣が戦争を起こすのは間違っている。故に慶喜の考えを尊重して、平和の哀訴嘆願をする。それでも聞き入れられない時は武士の意地を貫く、つまり死をもって目的を果たすべきであり、この順序を踏むのが至当と考える。このようなことを述べた。(菊池明　2010,p.14)

扨て諸君先刻より、御議論の趣は委しく承はつたが、今日の場合、一人一個で事を爲さうと致すのは宜しく無い。凡そ我々の同志と云う者は人数の多寡に関はらず、又た身分の高下に依らず、所謂る千百志を同くし、目的を一にして、事に当つて死ぬ！と云う覚悟が無ければ相協らん。で

---

16 須永於菟之輔　上野国新田郡成塚村の豪農の子。渋沢栄一の従兄弟。(小高　2008,p.22) 成一郎と栄一の関東募兵時に一橋家に召し抱えられる。(森　2004,pp.106-7)
成一郎への説得には従兄の須永於菟之輔も当たった。(森　2004,p.50) また成一郎が幼少期に教えを受けた尾高新五郎も説得し、自身も彰義隊に参加している。(森　2004,p.50) 尾高新五郎が彰義隊参加へとなったのは鳥羽伏見の戦い以前に成一郎と栄一から新五郎の噂を聞いた慶喜が召し抱えようとしていた。しかし、それに応じ上京途中の新五郎に敗報が伝わり彼は郷里に帰った。また、成一郎から慶喜の評判を手紙で新五郎に伝えていた。こうしたことから新五郎も水戸学信奉者であったため、成一郎らと同様に慶喜を信奉するようになっていた。(荻野　2015,pp.34-9) 彼の参加理由などはその自伝『藍香翁』に詳しい。

其我々の目的なる者を如何と問へば、必らず戦争を爲ると云うでは無くて、趣意たるや君冤を雪ぐと言ふに在る。即ち我公の爲に飽く迄も其の無実を解き、朝敵の汚名を雪めて、勤皇の御素志と云うを天下に明かに爲ると云うのに在る。なれど形勢は諸君も見らるる如く、旦夕に迫つて居る。倘し其の聴納れぬと云ふ場合に如何するかと云へば、其は御互に武士である。雙刀の手前、人事を盡して不可ぬ時には天命に委せて、唯だ一死有るのみである。なれど諸君も熟く視たまへ、目下我が主君たる慶喜公は如何なる有様で御在になるか？言ふ迄も無く謹慎である。主君の御謹慎中に其の家臣たる我々が戦争を爲る扞と云ふ、其様間違つた談は無い。然れば此は飽く迄も上様の思し召を奉体し、平和の哀訴嘆願と云うに出で。彌聴れぬ時、即ち事の成らざる際には其の心腹を一つにして、其處では武士の意地を貫く……死を以て目的を果すと云うに致しては如何ござらう。私は此事の爲には、此の順序を履むが至当であるものと考へる……。
（塚原　1909,pp.128-9）

これに皆同意し、血判署名して解散した。成一郎は次回の会合に各々、信頼に足る人間を連れてくるようにと伝えた。（塚原　1909,p.133）会が終わると天野八郎は成一郎の自宅を訪ね、彼らは義兄弟の契りを結んだ。（山崎　1910,pp.61-2）

次の会合である 23 日の浅草にも勿論、成一郎は姿を現した。ここで頭取となるのは前述の通りである。また、成一郎はここで幕臣以外の加盟を禁じ、素性の知れない者を排除する規定を設けた。（菊池 2010,p.20）

こうした結集は幕府の知るところとなり、当時の幕府総裁松平確堂は三河直守と大目付川勝丹後守に命じて、登城を促した。これに応じて、成一郎は隊士 100 人ほどを率いて登城、松平確堂に面会した。（山崎 1910,pp.62-3）松平確堂からの質問に対し、成一郎は彰義隊が無謀のものでないことを説明した。すると、確堂も慶喜が恭順しているから粗暴な挙動に出ないよう伝え、解散の必要もないと言った。後日、幕府側から成一郎を頭にするとの達しがあった。（山崎　1910,p.63）

彰義隊は結成後、日ごとに勢力を増し 300 人程度になった。2 月 26 日には旧幕府より江戸市中取締りを命じられる。この時点では出自の明らかな者で構成されていた。そして、少ないながらも食い扶持が出たため参加者も増え、1000 人ほどになり、慶喜を守護しようと 3 月中旬から上野東叡山へと移転する。（森 2004,pp.55-6）

成一郎は上野移転を自分の考えであるとし、浅草本願寺では形勢上、隊士の取締りさえ行き届かないためとしている。また、上野山内にいる遊撃隊（慶喜護衛）との衝突も考慮して、山外を彰義隊が担当することにした。（塚原　1909,p.137）ただ、3 月 2 日には慶喜から彰義隊へ恭順要請が出されている。（森 2004,p.285）

隊士が増えるに従って素性の明らかでない者も増えた。天野八郎は身分を問わず、参加者を募ったため

である。ここで成一郎の考える[17]幕臣のみの部隊という理想とは別のものになっていった。（菊池 2010,pp.22-3）また、成一郎は慶喜から呼び出され、血気にはやる隊士も多くいるが、あまりに過激な挙動に出ないように頼むと、伝えられた。（菊池　2010,p.22）

こうして有名な上野の彰義隊が出来上がっていったが、徐々に成一郎と天野八郎の対立が表面化し、渋沢派と天野派に隊士も二分されていく。4月上旬のことである。（森　2004,p.286）

それは二人の考え方の違いに端を発した。成一郎とって最も大事なのは慶喜の安全である。しかし、天野にとっては慶喜個人の安全ではなく[18]徳川家の存続が大切であった。（森　2004,p.109）この違いは両者の戦略にも現れた。成一郎は江戸で戦っても不利なため、日光への転陣を主張し、そのために豪商を呼び金穀を用意するよう命じた。（菊池　2010,p.63）当時の江戸市民は彰義隊びいきだったため喜んで応じたが、天野は成一郎のこの行動を恥ずべきものだと非難した。（山崎　1910,p.64）また、彰義隊は幕府の命脈であり、待遇がさらに良くなるとの噂が隊士の中にあった。これを信じる者は江戸から離れることを嫌い、成一郎の日光転陣論を喜ばなかった。（山崎　1910,p.63）前述したように隊士募集についても、成一郎は幕臣のみ、天野は身分不問と異なっていた。その上、隊士の多くは江戸在住で自宅から通うかたちで彰義隊に参加していた。（菊池　2010,p.22）

対立を解消するため、伴門五郎や本多敏三郎が調停を試みたものの成功しなかった。そして、渋沢派と天野派は互いに相手の悪い噂を流したり、刺客を送り込んだりもした。天野派優勢のまま時は流れ、4 月 11 日遂に成一郎は彰義隊を脱退することになる。その際、「官軍とならざること」「官軍に降伏しないこと」の二点を誓った。（森　2004,pp.108-10）なお、成一郎と天野の対立が激しくなると成一郎は潜伏生活を余儀なくされていた。（山崎　1910,pp.313-4）4 月 11 日は慶喜が寛永寺を出て、水戸へ向かった日でもある。成一郎にとって慶喜のいない上野に留まる理由はなかった。（森　2004,pp.109-10）なお、彰義隊士は随行を願ったが許されず、重役数名が千住や松戸まで見送りをした。成一郎も松戸まで見送っていた。（山崎 1910,pp.56-7）また、慶喜とその護衛の遊撃隊の一部が水戸へ行ったため、空いた山内へ彰義隊が入った。（塚原　1909,pp.138-9）

成一郎自身の脱退理由は『藍香翁』の中で次のように述べられている。

> 此際の事は、実に彰義隊の発起者たる私の口から申すのも恥しい理由。……真に言ふにも忍びぬと云う次第では有りますが。物の順序として御話を申さねば理が聞えぬ。で申すが。……私は「余義ない事情」から隊中の或る人々と意見の衝突を来して、折角の隊を看放した。
>
> と言ふのは既に上様が水戸へ御退去と有る以上は、此の上野に居つた所が爲方が無い。又た或は此處で一戦と云ふ場合に立ち至るかも知れぬが、其には第一、地の利を得ない。且つ江戸市中へ

---

[17] 成一郎が人物を限定したのはこの時期、似たような団体がいくつもあり、その中には浮浪の士を集めただけで強盗を働くようなものもあり、そうした他の団体と差別化を図るためである。（塚原　1909,pp.134-5）

[18] 勝海舟と西郷隆盛の会談で江戸総攻撃は 3 月 14 日に中止され、徳川家存続の見通しはこの時点でついた。慶喜の生命保証も同じである。（松浦玲　1997,p.186）

惨害を与へねば爲らぬ。故に一たび屯集の地を転じたが宜かろうとの事を、一夕、首立つた者へ向て協議に及むだ。

扨て此義を言ひ出した其実はと云へば。右の「余儀ない事情」からで。……今私が其れを言ふのも甚だ穏かで無いか不知ぬが。何しろ当時の隊中内部の不規律と云ふものは御話にも爲り難る程のもので、乱暴狼藉、殆んど手が附られぬ。其の乱暴も、探索つて見ると、一概には言ぬが、彼の鮫が橋円応寺に集会つた人人よりも、追々後から加入して来た連中に多い。然も其者が隊の多数を占得て居る。で、此等の連中が意向と云ふを更に探偵る。と恁う云ふ実に怪からぬ料見のである。

其は、其時の風説に、朝廷が関八州を幕府に与える。……最初は一箇国か二箇国の心算で有つたのが、中々旗下の士に豪い者が在て、此處で下手に騒立せては手に卒ぬから、八州を与れる。而して鎮撫する。……と恁う云ふ風評が世間に伝はつた。……本来ならば然う云ふ説を耳にしたらば、猶ほ鋭を養ひ、機を蘊むで、敵をして、隠然一大敵国の如き思を爲さしむるのが兵家の秘訣で、且つ最も当時の時宜に適した所作で有らうのに。馬鹿な！隊士は忽ち勢に慢じて、『乃公達が居るからこそ朝廷でも然う折て出るのだ。最と思ふ様に遣れ！』といふもので彌々其の乱暴を増長させると云ふ光景。……で、私も[19]翁と相談して、『此では不可ぬ。此の風説を実にするには旗幟厳正、配下の規律を整然たるものにして、朝廷の遣口を監督すると云ふ位地に立ねば行ぬ。其には暫く江戸を去って、五七里も離れた田舎へ引揚げると云ふに爲様と思うが如何だらう？』『如何にも道理である。此の江戸の中央に居て彼等の取締の厳重を望むは目笊を以て洪水を防ぐが如きもの、労して功無きもので有る。』と、此で両人協議を盡して、右の上野退去説を提出したので有りますが、彼等は中々肯きませぬ。『其の引揚の先は何處で有る？其の場所に依ては御同意も致さうが。併し江戸市内を離れると有つては御相談には乗り難ねる。』と頑張るのである。何故然う頑張るのか、最初は私共にも解ら無かつた。處が段々跡で聞くと。彼等の此處（上野）を動きたがらぬにも大きに曰くが有る。其の「曰く」は矢張り右の関八州云々の伝説で。彼等の意中には、彌々右の八州を徳川家の手に貰うとすれば、此の貰つたは誰の力だ？我々の力に相違無い。然すれば此を固く守つて踏耐へて居れば、二三男厄介の謂ゆる「冷飯」（寒酸の意）でも二百石三百石の旗本に取立られるに決つて居る。否や、必らず然う爲る筈の物。と恁う云ふ野心を内々持て居たのだから、此は翁や私が幾許利害を説いた處が聴入れぬ理由のである。で其夜一晩種々前途の事に就いて討論した。なれども私共の説が容られぬから、此で是非なく翁も私も『然らば余義ない。不本意では有るが、見込が無いから、私共は分離する。』『其では何うか御勝手に。』と恁う云ふ別話で、両人とも上野を去った。而して翁も私の家へ同居を爲れた。

（塚原　1909,pp.140-4）

このように渋沢成一郎は彰義隊への参加、脱退となった。

鳥羽伏見の戦いの後の成一郎にとって大事なのは慶喜の雪冤と安全であった。彰義隊に参加、頭取となったのも慶喜のためにこの組織を活かせると考えたからである。しかし、隊士が増えるにつれて旧幕臣以外

---

19 尾高新五郎

の人間も参加するようになり、かえって慶喜の立場を悪くする危険性も出てくる。それは慶喜が彰義隊に恭順要請をしていることからも明らかである。天野派が優勢になってからも成一郎が上野に留まり、自派の巻き返しを画策していたのは上野に慶喜がいることと天野派が慶喜を担ぎ出し、新政府軍への徹底抗戦を叫ぶことを恐れたからである。その危険性があったことは慶喜を守っていた高橋泥舟らの精鋭隊と榊原鍵吉の見廻り組が彰義隊の上野入りの後、その暴発を恐れて慶喜を守っていたことからも読み取れる。(森 2004,p.92) また、日光転陣については戦うと決めた以上は戦うが、新政府軍から慶喜がそこに関与していると疑われることを避ける目的もあった。よって、この時期の成一郎は慶喜を守ることを第一に行動していたと言える。

上野に残って、5月15日に新政府軍と戦った者の中には成一郎と栄一が一橋家家臣時代に行った関東での募兵に応じ、その後[20]一橋家家臣→幕臣へと進んだ者もいた。そして、[21]成一郎らより前から一橋家家臣である者もいた。箱館まで戦い抜く成一郎にはそうした者たちから卑怯者・臆病者と罵られてはならないという意地や自身は成り上がって幕臣へと進んだため、保身を第一に考える旧幕臣たちと同一視されてはならないという思いもあったと考えられる。その戦い抜く覚悟は日光転陣の主張からも読み取れる。彰義隊に参加したこの時期に成一郎の中には以前からの慶喜を第一に考える思いと新政府軍と戦い続けるという二つの思いがあった。

さらに、成一郎の頭の中には戦い続ければ、事態は好転するという淡い期待もあった。それは小栗忠順と慶喜の二人が成一郎と会った際伝えたことに由来する。

時間は遡ることになるが、慶応4年2月28日に小栗忠順は江戸を発ち、知行地の上州権田村(現群馬県)に向かった。これは抗戦派だった彼が1月23日に彼が慶喜に罷免され、江戸に留まる理由もなくなったからである。彼は渋沢成一郎と会っていた。そして、次のことを語った。

> 小栗がいうには、「[22]予が抗戦を主張したのは、実に考える所があってのことである。無謀の血気にはやったのではない。しかし、事すでにここに至り、人心が挫折して、機会はすでに去った。たとえ、東北諸藩が連衡(連合)して戦っても、主将〔慶喜〕がすでに帰順した以上、もはや何事をなし得ようか。とは言っても、戦いが平定した後、強藩が互いにその権力を争い、必らず仲間喧嘩をして、国内が割拠する状態に至ることがあろう。その時こそ直ちに起って、主公を奉じて天下に檄をとばし、もって中興を計るであろう。もし、そうでなく、天下が太平を謳歌するに至ったなら、一頑民となって世に終わろう」と。
> (田辺太一　1966,pp249-50)

これは後年、旧幕臣の田辺太一に成一郎が語ったものである。『幕末外交談』の中にはこれがいつのことであったか記されていない。蜷川新の『維新前後の政争と小栗上野の死』には小栗が江戸を去る前夜とある。

---

20 小川椙太や新開儀三郎など
21 本多敏三郎や伴門五郎、比留間良八など
22 鳥羽伏見での敗北後の小栗の作戦計画については蜷川新の『維新前後の政争と小栗上野の死』に詳しい。

しかし、小栗側の記録である日記には江戸を去る前日、つまり慶応4年2月27日に出会った人として渋沢成一郎の名前は挙がっていない。(高橋敏　2013) その理由などについてここでは詳述しないが、ともかく後に成一郎が語ったことから彼の頭に強く残っていたことは明らかである。また、この時、成一郎は小栗に天野派に染まりつつある彰義隊を束ねてほしいと依頼した。もちろん、小栗は拒否した。しかし、このことで成一郎は名分がないと隊は存続できないと気付き、幕閣へ公認のための働きかけを開始した。(加来耕三　1984,pp.95-6) この小栗の語った内容の後半、「…必らず仲間喧嘩をして、国内が割拠する状態に至ることがあろう。その時こそ直ちに起って、主公を奉じて天下に檄をとばし、もって中興を計るであろう。もし、…」とある。幕末きっての賢臣として知られた小栗のこの言葉を聞いた成一郎は新政府軍が戦いの後に自滅し、[23]再び慶喜が政治の舞台に上がることを期待したと考えられる。小栗は東北の諸藩連合は何もできず、新政府軍は戦いの後に自滅するとしたが、成一郎はこの点は小栗と同じように考えず、戦いの最中でも新政府軍の自滅はあると考えていたかもしれない。箱館まで戦い抜く成一郎の中には常にこのことが頭にあったと考えると慶喜の水戸退隠後も戦い続けた彼の行動を説明できる。また、小栗は権田村での隠居生活に入り、何も起きなければ、二君に仕えない「頑民」として生きようとした。成一郎はそれに対し、行動し続ける「頑民」として、隠居ではなく戦う選択肢を選んだと言える。

次に慶喜である。成一郎は上野で慶喜と面謁する機会が何度かあった。(山崎　1910,pp.290-1) その際、「北関東、海軍、府内をまとめた軍で西軍に対抗できる。そうすれば、東国の諸侯が来る。その間、慶喜は日光で待っていればよい。」と建言したという。(加来　1984,pp.107-8) それに対し、慶喜は次の一首を「神君の御詠なり」と認め、下賜した。そして、成一郎は隊士にこれを見せつけた。(山崎　1910,pp.290-1)

まけてのく人を弱はしと思ふなよ智慧の力のつよきゆへなり
(山崎　1910,pp.290-1)

この慶喜から授けられた言葉や前述の小栗の予測を成一郎が再起の意志があると受け取ることもできる。

鳥羽伏見の戦いの後の成一郎は慶喜の雪冤のために動いた。そして、彰義隊を結成した。彰義隊結成当初の成一郎には抗戦の意志はそこまで強くなかったが、全く無いわけではない。それは鳥羽伏見の敗走後、慶喜の帰府を知りつつも大阪城で戦うことを主張したことからわかる。しかし、慶喜が恭順している以上、成一郎も主君の安全と雪冤のために動く以外のことをする気はなかった。

隊士が増え、天野派と対立するとその暴走により慶喜に害が及ぶことを避けるために動いた。これも慶喜のためである。慶喜が水戸に退くと上野から成一郎も離れる。こうして慶喜を第一に考えることは今まで通りである。すると、慶喜の退隠に従い、成一郎も矛を収めればよいとも言えるであろう。また、慶喜を信奉する者としてはそうすべきと考えることもできる。

---

23 小栗と慶喜の仲はあまりよくなかったとする説もある。

しかし、一度彰義隊に加わった以上、初志を曲げることはできないという信念や上野にいる天野ら彰義隊士などに対する意地、小栗と慶喜の言葉を再起の意思があると解釈し、戦い続ければいつか事態は好転するという期待から恭順しなかった。慶喜の水戸退隠で彼の身の安全は一応確保され、自身の抗戦が慶喜に影響することがなくなったのも成一郎の決断に作用した。こうして慶喜の安全が確保された後の成一郎は自らの信念や意地を通すため、箱館まで戦い続けることになる。

5、振武軍と飯能戦争

慶喜の見送りから戻った成一郎は慶喜のいない上野にいても何の意味もないことを説いた。さらに江戸で戦うのは不利であり、市民への被害も出ることから以前と同様に転陣を主張した。(菊池　2010,p.28)
また、彰義隊と新政府軍の開戦は必至だと彼は見抜いていた。(荻野　2015,p.40)

そこで、上野を離れた成一郎は4月下旬、杉並堀之内で振武軍を結成する。これは江戸から離れた場所で形勢を窺うためであると彼は説明した。(菊池　2010,p.31)
成一郎自身の口からは脱退後の行動の趣旨を次のように語っている。

> 翁も勿論遺憾では有ろうが。苟にも盟主の地位を汚した私の身に爲つては、残念で堪らぬ。隊が以前の隊で無いから関はぬ、と言つては澄して居れぬ。加之らで、彼の隊中にも鮫が橋時代から……若くは其後から加入した連中にも、真面目な人々が有る。此等は真に其の以前の決死隊の精神を依然だから、必然官軍と衝突して戦争するだらう。其時には私の立場として傍観は出来ぬから。是れは一つ、真正に一隊の同志を集合て、別軍を組織し。予ての持論の江戸より余り遠く隔離れぬ形勝の地を占得て、物の成行を窺はうと云ふ計画を立てた。……其處で密に同志の人数を集合た所が追々と来り加はる者も殖えて、今は二百余りの団体が出来たので。乃ち私が其の盟主。翁も再び参謀の位地に就れた。
> 当時の私の住宅は大塚であつた。處が其の時分、かの彰義隊と入府の官軍との衝突が激烈くなつて。(中略) 然るに官軍では其の狼藉を私が働かせるとでも誤想たのか、或る夜の事、四五十人の一隊が私を捕へやうとして、宅を襲つた。(中略) 実に私の当時の体は敵味方から狙はれると云ふ。馬鹿な話で……。
> 處で。『恁う爲つては爲方が無い。捕へらるるに先んじて兵を挙げ様か、何うだらう。』と翁とも協議に及むだ所が。『無論の事である。昨今の形勢は捕拿らるれば殺される。近藤勇などが其例である。準備は些し不足ぬけれども、ナニ其は又た如何にか爲らう。只だ速かに人数を集めて、一は身を護り、一は此の乱暴を働らく西軍を駆逐うが宜らう。』と云ふ翁が意見ので。然らばと即夜に堀の内の祖師堂の途の信楽といふ茶屋へ、我が団体の会合を求めた。殺急の会では有つたが、其れでも同所へ馳せ集つた者が八九十人。……扨て評議に掛けた所が、一同も『然う暴力を加へらるる様では、矢張り此方より先んじて兵を挙るか。然無くても我々の素志を貫徹く其の方便として、兎に角自衛の必要が有る。』と恁う云ふ説に一致して。此で堀の内から三里を離れた田無と云ふ村へ一同を先ず発たせた。
> 一同をば発せたが、自衛を爲すにも、大事を挙るにも、第一に先つ物は武器である。處が其物が

無い。翁も此れには窮つた。（後略）

（塚原　1909,pp.147-9）

また、なお、上野の彰義隊の方は江戸に入った新政府軍との間でたびたび殺傷事件を起こし、両者の対立は深まっていく。また、寛永寺執当職の覚王院義観が彰義隊を支え、隊士は3千人まで増えていた。（山崎　1910,pp.76,102-3）最終的に新政府側は大村益次郎を呼びよせ、5月15日の上野戦争となるのだが、経過などについてここでは詳述しない。

閏4月19日に振武軍は田無村への転陣を開始する。その後、5月1日に田無の西光寺を本陣とし、11日には箱根ヶ崎へ移った。滞在先や道中では同士を募り、近くの村からは軍資金を供出させた。箱根ヶ崎転陣は田無だと江戸に近く、奇襲を受ける恐れがあったためである。そして、江戸への道中に成一郎は見張りを配置し、上野で事が起これば、すぐ援軍として赴けるよう準備した。（菊池　2010,p.31-7,228）

振武軍の戦略について、成一郎は次のように述べている。

> 處が此の田無と云ふ所は秩父街道で、新宿を距ること僅に四里。（中略）然れば敵軍で奇兵を放つと、一夜の中に襲はれる惧れがある。其には十里以上を離れて居れば、一日路には難しい。先は途中で一泊となる。途中で一泊すると爲れば、此方にも其の消息は分る。随つて其の準備も出来れば、時宜に依ては倒つて此方から其の逆襲を試みる手段も成る。と恁う云ふので、右の田無から箱根が崎へ引揚げた。此の箱根が崎は青梅路で、田無からは五里。即ち新宿から九里余の土地になる。
>
> 箱根が崎へ引揚げたは然う云ふ理由で、別に此所で戦争を爲様と云ふ心算では無い。唯其所で上野の彰義隊に対する官軍の動静を窺やうと云ふので。其で斥候を田無から淀橋、新宿、四谷、番町と云ふ各所に置き、互迭に連絡を取て。『上野でドンと云ふ砲音を聞いたら直ぐ馳帰れ。』と騎馬の用意迄も爲せて置ました。が、扨て其節には如何いふ運動を取るかと申すと。直ぐ引返して官軍の側面を撃うと云ふ覚悟。尤も其義を別に彰義隊と打合せたでは無れども、詰り彼隊の別働軍と云ふ位置に居つた訳。併し当時、然う云ふ目的で準備をして居た団体と云ふものは諸方に有つた。で、倘し彼の時上野の戦争が翌日まで続いたならば、其の戦況は那れ程迄に広がつたか分らぬです。即ち[24]諸方の屋敷々々に潜むで居て、夜中に爲たら火を放けて討て出やうと待構へて居た連中が少数くは無いから、余程目凄しい事に爲たらうと思ふ。然し、其が然も無く、上野が一日に落ち、此等の人々が出端を失つて、御承知の如く無事に済むだは、残念とは云ふものの、市中の爲には畢竟幸福とも云ふべきので……。
>
> （塚原　1909,pp.156-8）

5月15日の朝、上野戦争が始まるとその報せは15日の夜に箱根ヶ崎に着いた。（塚原　1909,p.158）直

---

24 山崎有信の『彰義隊戦史』では、彰義隊が夜まで持ちこたえれば、放火しようと計画していた者として平野夏雲（浅草・蔵前）、田辺太一（下谷長者町）の名前が挙がっている。（山崎　1910,p.232）

ちに出陣し、振武軍は田無に16日の朝着いたが、そこで15日の昼にはすでに上野の彰義隊は敗走したという情報を得る。(塚原　1909,p.158) 仕方なく成一郎は引き上げることになる。16日には田無付近で上野からの敗残兵を自隊に組み込んだ。(新井　清壽　1988,p.47) そして、田無から飯能へと転陣する。飯能に着いたのは18日である。(飯能市郷土館　2011,pp.14-5) 飯能に拠ったのは1つ目に飯能付近が一橋領であり、成一郎が慶応2年にこの付近で農兵集めを行ったため地理に明るかったこと、2つ目に飯能では負けても山越えして各地に敗走、その後の再挙が可能という理由からである。(新井　1988,p.34) また、もう一つの候補地として青梅が上がったが、日向和田まで行き調査したところで断念した。(飯能市郷土館 2011,pp.14-5) 成一郎は新政府軍が攻めてくることを予想し、[25]迎え撃つ態勢をとった。飯能には上野で敗れた[26]臥龍隊500人、共同隊300人が入ってきた。(飯能市郷土館　2011,p.28) 新政府軍側は川越藩、忍藩、備前岡山藩、芸州広島藩、福岡藩、久留米藩、大村藩、佐土原藩の兵をもって、飯能攻撃に当たった。(飯能市郷土館　2011,p.23)

戦闘が始まったのは5月22日から23日にかけての夜である。振武軍の飯能から22日夜襲のため出陣した100人が新政府軍の斥候と遭遇、戦闘となった。(飯能市郷土館　2011,p.28,31-2) 新政府軍は地理に明るくないため夜明けを待ち、23日の朝から本格的な攻撃を始めた。(飯能市郷土館　2011,p.31-2) 23日の昼前には大勢は決し、[27]振武軍は敗走した。(塚原　1909,pp.160-1) 成一郎は飯能→伊香保へと逃れ、その付近で潜伏した後、江戸に出てきて榎本武揚率いる旧幕府海軍に身を投じた。尾高新五郎も成一郎と共に伊香保へ逃れたが、彼は草津、前橋を通り郷里へ戻った。(塚原　1909,pp.161-2)

6、箱館戦争

伊香保から江戸に入った成一郎がいつ榎本の艦に乗り込んだかは定かではない。しかし、長鯨の艦上で彰義隊の再決起の盟文を著し、新しい彰義隊の編成もしている。(菊池　2010,pp.94-7) 盟文は以下の通りである。

> 旧冬来四藩の姦魁等、異名同罪の奸徒に与し、幼冲の君上を欺き、有司百官を愚弄し、将軍を駆ひ、関白を駆り、歴代の良典を廃し、先帝の厚志を破り、悪として爲さざるなく、二百余年比類なき治世をして、遂に干戈槍戟の街と爲す。況乎君家倒懸の急に至る。臣子の分、有志の徒、豈手を空くして之を望むに忍びんや。故に向きに血誓して之を謀る。惜哉、五月十五日の戦に志を

---

25 飯能屯集の振武軍の人数は4～500人。これに上野の敗残兵が加わる。(飯能市郷土館　2011,p.28)

26 臥龍隊は幕臣の間宮金八郎が率いて上野戦争を戦った。隊長の間宮と成一郎の関係には2説ある。1つ目は伴、本多の仲介で知己があったという説。2つ目は間宮が上野入りする際、本多と成一郎がその入隊手続きに当たったことで知り合ったという説。成一郎の脱退に対して、本多の助言でしばらくは上野に残り、ゆくゆくは振武軍に合流しようと考えていたところ上野戦争となり、間宮は戦死した。こうした関係から臥龍隊は振武軍に合流した。(加来　1984,p.257)
共同隊300人は21日、飯能泊。22日早朝、今市村法恩寺へ移り飯能戦争には参加しなかった。(飯能市郷土館　2011,p.41)
臥龍隊をはじめ彰義隊の敗残兵は飯能での戦いにおいて、その全てが成一郎の指揮下に入ったわけではない(飯能市郷土館　2011,p.3)

27 渋沢栄一の養子渋沢平九郎は飯能戦争後の敗走中、自害した。彼の詳細については渋沢華子『彰義隊落華　渋沢平九郎の青春』や宮崎三代治『飯能戦争に散った青春像　郷土の志士渋沢平九郎』に詳しい。

得ず。爾来誓紙を脱する者あり、又新に加はる者あり、頃間新入を求むる者多し。故に今更に天地神明に誓ひ、上は偽命を正して叡慮を安んじ、次は君家を恢復して二百余年の厚恩を報じ、下は百姓塵炭の急を救ひて、再び昇平を致さんと欲す。庶幾は神明、仏陀、我輩の丹心を照し、幸に其志を遂げしめ給へ、若し違ふ所あらば、天誅立所に至る可し。仍て盟約如件。

慶應四年八月

（山崎　1910,pp.168-9）

この文章には 8 月とあるため、遅くともそれまでに成一郎は乗り込んだとわかる。この新しい彰義隊でも成一郎は頭になった。しかし、それ以外の幹部は上野で戦った天野派で占められている。また、再編成には成一郎と天野派の面々との間でひと悶着あった。この彰義隊は総勢 200 人前後で成一郎が連れてきたのはそのうち 35 人ほどだった。（菊池　2010,pp.94-7）榎本の艦隊は奥羽越列藩同盟との共闘を目指し、北へ向かう。この中で成一郎は仙台での列藩同盟の軍議に[28]榎本たちと共に出席している。9 月 3 日のことである。（菊池　2010,pp.102-4,229）列藩同盟が望み薄と悟ると、榎本は北海道を目指す。そして松前藩との戦闘、攻略、箱館を本拠地とするいわゆる[29]蝦夷地政府を樹立する。松前藩との戦闘に成一郎は彰義隊を率いて参加した。（菊池　2010,pp.117-8）しかし、成一郎と上野で戦った[30]旧彰義隊士たちはまたしても対立してしまう。原因は成一郎が松前城突入の際、金蔵を荷車に乗せて城外に運び、隠している内に先陣争いに敗れたためである。ただ、これは反渋沢派側の史料に基づく記述のため、真偽はわからない。（菊池 2010,pp.128-31）この対立を成一郎は土方歳三に訴え、大塚・織田・新井・木下の 4 人の幹部がその職を停止される。（菊池　2010,p.131）しかし、彼らは従おうとせず、土方はひとまず成一郎に従って出陣するよう他の幹部（寺沢・秋元・上原・堀内）に命じるが、この是非を巡って反渋沢派も意見が分かれた。そこで、職を停止された 4 人の幹部の謹慎を解き、菅沼と池田を仮の頭として江差へ進軍することになる。11 月 13 日のことである。この時、成一郎は自分に従う者たちと松前に残った。（菊池　2010,pp.131-3）蝦夷地を平定すると、諸隊は箱館や松前に凱旋したが、彰義隊のみは分裂騒動のペナルティとして隔離された。問題解決には榎本武揚が乗り出した。榎本は反渋沢派の主張に理解を示し、菅沼と池田を頭に任じた。成一郎がこの間どう行動したのかは史料がなくはっきりしない。湯の川に潜んでいたとの説もある。ただ、彰義隊が五稜郭に入った 12 月 14 日までには成一郎と彼の支持者らは亀田村（五稜郭付近）か箱館に戻っていた。そして、正式に渋沢派と反渋沢派の分隊がこの年（[31]明治元年）の末までには決まった。（菊池　2010,pp.137-9）

渋沢派は「小彰義隊」と名乗ったが、30～80 人程度の人数のため一部隊として存続できず、伝習仕官隊の三番小隊として行動する。さらに部隊に成一郎が残ると反渋沢派の「彰義隊」と軋轢を生む可能性を考慮して、成一郎は「[32]陸軍奉行添役」として五稜郭勤務となり、隊は小林清五郎が率いることになった。（菊

---

28 仙台に上陸、軍議に加わったのは成一郎のほか、榎本武揚・松平太郎・ブリュネ・カズヌーブ・田島金太郎・小杉雅之進・人見勝太郎・岡田斧吉・春日左衛門・永井尚志・板倉勝静・土方歳三（菊池　2010,p.102）

29 蝦夷地政府という名の妥当性には賛否あるが、ここでは便宜上、蝦夷地政府としておく。

30 大塚霍之丞・織田主膳・新井鐐太郎・木下福次郎・丸毛利恒・堀内惣平・寺沢儀太郎（菊池　2010,p.130）

31 元号：慶応→明治へ

32 陸軍奉行添役は閑職ではない。陸軍奉行の補佐役として各隊から集められ、今井信郎や相馬主計も抜擢されている。（菊池　p.144）

池　2010,p.144）

年が明け、明治2年になると3月22日、旧幕府軍は軍艦「甲鉄」を奪うため宮古湾へ出港する。いわゆる宮古湾海戦でこれに敗れた旧幕府軍は26日箱館に帰港する。（菊池　2010,pp.160-6）雪解けを待った新政府軍は4月9日、上陸作戦を開始する。（菊池　2010,p.169）数に劣り、海軍力でも逆転された旧幕府軍諸隊は各地で奮戦するも敗走、5月11日には新政府軍の五稜郭と箱館市中への総攻撃が開始された。（菊池　2010,pp.194-5）この一連の戦いの中で「小彰義隊」は湯の川方面の警備を担当していた。新政府軍の総攻撃が開始されると一本木関門の奪還のための戦いにも加わった。（菊池　2010,pp.199-201）5月12日になると、旧幕府軍の残る拠点は五稜郭と千代ヶ岡陣屋、弁天台場のみとなった。新政府軍側はすでに停戦に向けて動いていた。13日からは旧幕府軍側の脱走者が相次ぎ、厭戦感が広がっていた。15日には孤立した弁天台場が五稜郭の意向に反して降伏。16日、千代ヶ岡陣屋への総攻撃が行われ、陥落。17日には五稜郭の榎本らが新政府軍と会談し、翌18日に正式な降伏となり戊辰戦争は終結する。（菊池　2010,pp.201-11,233）

成一郎と小彰義隊は16日に千代ヶ岡陣屋にいたが、総攻撃の中脱走する。また、五稜郭にいた織田主膳、池田大隅守、浅川文三郎も成一郎と共に湯の川へ脱走した。なお、千代ヶ岡陣屋の総攻撃が開始されると、彼らのように脱走して湯の川に走る者、五稜郭へ戻る者、戦う者と各自の判断で行動した。彼らに留まらず、脱走者は諸隊に見られた。（菊池　2010,pp.206-8）五稜郭が正式に降伏すると、旧幕府軍の人々は寺などへ収容された。しかし、成一郎は五稜郭降伏後も湯の川に潜伏し、6月18日になって出頭。7月5日に東京へ送られ、軍務官糾問所に収容された。（菊池　2010,pp.216-7,233）こうして成一郎の戊辰戦争は幕を閉じた。ちなみに、箱館戦争の籠城策を栄一は自伝の中で批判している。その上で勝利の望みは無いのだから、成一郎に対しては潔く戦死するよう手紙を送っている。（雨夜譚　pp148-50）ここから彼らには武士として潔くあろうとする意識が窺える。

7、まとめ

渋沢成一郎は当初、水戸学を学んだ。そして、尊王倒幕を実行しようと高崎城乗っ取り計画まで作った。結果的に実行されず、その後の偶然の事件の連続から一橋家に仕官した。慶喜に成一郎が入れ込んだのは一つ目に慶喜が斉昭の息子であること、二つ目に京都で慶喜の尊王の志の篤さを知ったこと、三つ目に英才と謳われた慶喜の素質に惹かれたこと、という理由が挙げられる。つまり、水戸出身の慶喜ということが成一郎の慶喜受容に負うところが大きかったと言える。

一橋家仕官から戊辰戦争終結までの成一郎の行動の裏には一貫して慶喜の安全と雪冤のためという意識が働いていた。しかし、鳥羽伏見の戦いの後の新政府軍の江戸進軍に対して、慶喜の安全を確保するには戦って勝つ以外に方法が無いのか、それとも、恭順で許されるのか何が最善策かわからない情勢だった。そこで、どちらにも対応し、安全確保と雪冤の目的達成のため彰義隊を結成した。しかし、成一郎の思い通りにはいかなかった。また、慶喜の再起の可能性も捨てきれなかった。

慶喜の安全確保後はその雪冤が成一郎の行動の源となった。ここでも、戦うことが雪冤につながるのか、戦わないことが良いのか、わからなかった。もし、慶喜がここで再起したのなら、それは確保した安全（自身の命）を捨てるという意味になるから成一郎はこれに従い、戦ったであろう。しかし、現実はそうなら

なかった。慶喜に再起する気があったかどうかやあったのならいつまでそれを保持していたかは重要な問題であるが、ここでは本論から脱線することになるので述べない。結局、成一郎は戦うことを選ぶ。そこには、ここまで述べた慶喜の雪冤と再起の可能性に加えて、彰義隊を結成したことへの責任感や「4、彰義隊結成と分裂」で述べた様々な人たちへの意地といった理由があった。言い換えれば、それは成一郎自身の出自が武士ではないが故に、より武士らしく振舞おうとしたと言える。生まれながら武士階級であるのに幕府のために戦わない者や武士に取り立てられたら肩で風を切るような者などへの真の武士は自分であるという成一郎の意地とも考えられる。そして、その意地は「潔くあろう」と語り合った栄一に応えるものでもあったのだろう。また、慶喜同様に恭順しようが、新政府軍に抵抗しようが朝敵であることに変わりはない。それならば、戦うという形で新政府や民衆に対して、我々は朝敵ではないということを示し続けるために行動したとも言える。さらに、箱館まで行ったことには、やるからにはとことんやるという成一郎個人の資質（一橋家仕官後の行動や開戦後の徹底抗戦の主張などから見て取れる）が作用しているかもしれない。

しかし、箱館戦争になると、成一郎は戦いに対して、消極的になる。それには勝利も慶喜の再起もここまで来ると望み薄になってしまったことや新政府軍の艦砲射撃など凄まじい砲撃で旧幕府軍の歴戦の兵士たちも戦意を喪失したこと等の理由が挙げられる。また、成一郎の行動の中には金蔵に一番に入るなど問題とされるものもあったが、ここではその妥当性や彼に近代軍隊を率いる才覚や器があったかなどには言及しない。

成一郎の行動は全て慶喜のためであった。幼少期に彼は、郷里で水戸学を学び、尊王倒幕に傾倒した。一橋家仕官になると、「一橋家（慶喜）≠幕府」と解釈し、水戸学を体現する存在として慶喜を受容した。そして、彼のために動き続けた。これが幕末維新期の渋沢成一郎の思想と行動であった。

8、参考文献

浅見徳男『埼玉ふるさと散歩　飯能市・名栗村 さきたま双書』さきたま出版会　1990年

新井清壽『飯能戦争』飯能郷土史研究会　1988年

石井孝『戊辰戦争論』吉川弘文館　2008年

荻野勝正『尾高惇忠』さきたま出版会　2015年

小高旭之『幕末維新埼玉人物列伝』さきたま出版会　2008年

加来耕三『真説上野彰義隊』株式会社NGS　1984年

加藤三吾『埼玉縣人物誌』岩波書店　1921年

加太こうじ『彰義隊挽歌』筑摩書房　1992年

菊池明『上野彰義隊と箱館戦争史』新人物往来社　2010年

小島茂男『幕末維新期における関東譜代藩の研究』明徳出版社　1975年

佐々木克『戊辰戦争　敗者の明治維新』中央公論新社　1977年

渋沢栄一　長幸男校注『雨夜譚―渋沢栄一自伝―』岩波書店　1984年初版

渋沢華子『彰義隊落華　渋沢平九郎の青春』国書刊行会　1986年

新人物往来社編『三百藩戊辰戦争事典（上）』新人物往来社　2000年

高橋敏『小栗上野介忠順と幕末維新』岩波書店　2013年
田辺太一著　坂田精一訳・校註『幕末外交談　2』平凡社　1966年
塚原蓼洲『藍香翁』藍香翁頌徳碑建設発起人総代　高橋波太郎　1909年
長島進『覚王院義観の生涯』さきたま出版会　2005年
蜷川新『維新前後の政争と小栗上野の死』日本書院　1928年
飯能市郷土館『特別展飯能戦争　飯能炎上―明治維新・激動の六日間―』飯能市郷土館　2011年
飯能市郷土館『飯能戦争関係史料集』飯能市郷土館　2012年
牧野洋編『別冊歴史読本第36号　幕末維新三百藩諸隊始末』新人物往来社　1999年
宮崎三代治『飯能戦争に散った青春像　郷土の志士渋沢平九郎』まつやま書房　1983年
村上泰賢『小栗上野介』平凡社　2010年
森ますみ『彰義隊遺聞』新潮社　2004年
山崎有信『彰義隊戦史』隆文館　1910年
山崎有信『彰義隊顛末』山崎有信発行　1917年　再版1927年
吉村昭『彰義隊』新潮社　2009年
松浦玲『徳川慶喜』中央公論社　1975年初版1997年増補版